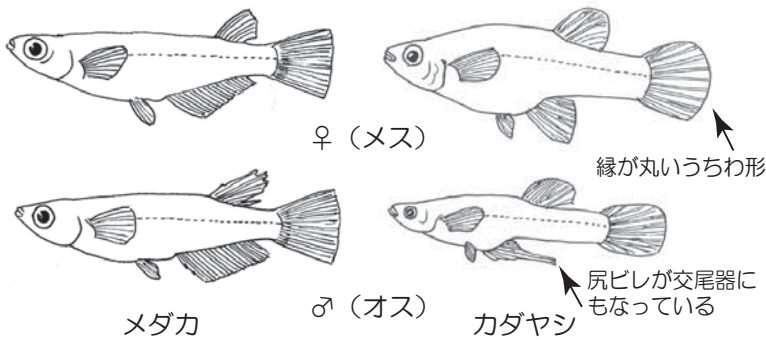


魚類・貝類・甲殻類

魚類 28種が記録されています。新川は印旛沼につながっているため、いろいろな種類の魚がいます。その中で、ホトケドジョウ、メダカなどは、特に少なくなってきた種です。

メダカとカダヤシ

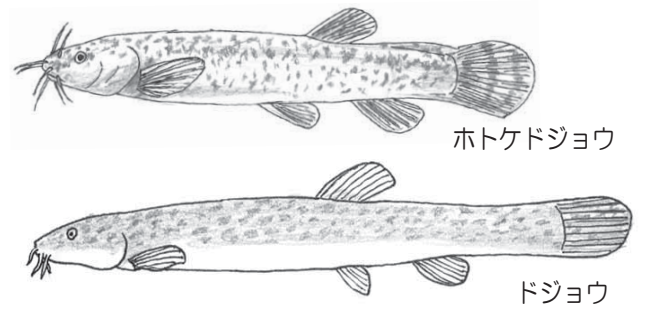


尾びれの後縁が“まっすぐ”なのがメダカで、“うちわ”の形をしているのがカダヤシです。尻ビレの形もオスでははっきり違います。

メダカは、以前は水田やその周辺の小川に普通に見られた魚ですが、水路の改修などにより最近では市内の生息地はごくわずかになってしまいました。カダヤシは外来種です。

メダカは卵を藻などに産みつけますが、カダヤシは卵胎生で稚魚を産みます。

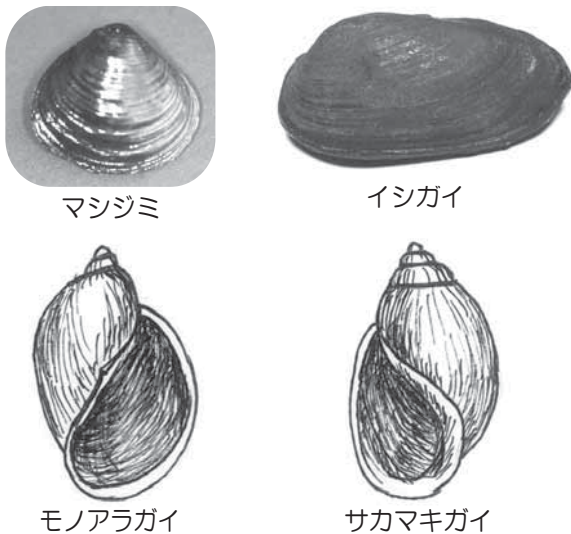
ホトケドジョウとドジョウ



ホトケドジョウはヒゲが8本で、ドジョウは10本です。体はドジョウに比べてすんぐりしています。体長は6cmぐらいです。水のきれいな細流などに生息します。谷津の環境が改善されたためか、市内では絶滅の危機にあります。

ドジョウはえらで呼吸するほか、口から吸い込んだ空気を腸からも吸収することができるため、水中の酸素欠乏にも強く、農業用の水路などで生き残ります。体長は12cmぐらいです。

貝類 10種が記録されています。そのうち二枚貝類はイシガイ、マシジミ、ドブシジミで、巻貝類はマルタニシ、モノアラガイ科の1種、サカマキガイ、カワニナなどです。

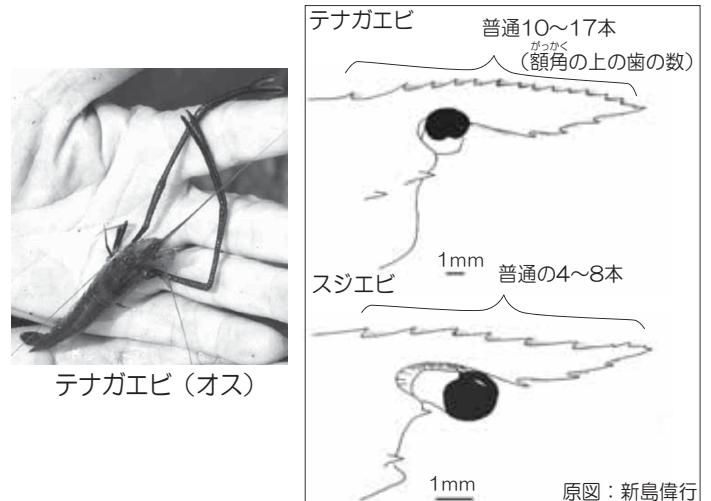


巻貝（モノアラガイとサカマキガイ）の見分け方：モノアラガイ科の貝殻は右巻きですが、サカマキガイは字のごとく反対の左巻きです。殻口を上にとすると右巻きは右側に口を開きます。サカマキガイは外国から来た生き物（外来種）で、水の汚れに強く、市内で最も普通に見られる貝類です。

モノアラガイ科の貝やサカマキガイ、カワニナは、ハイケボタルの幼虫のえさになります。また、イシガイはアカヒレタビラなどのタナゴ類が、卵を産み付ける母貝として利用しています。

甲殻類 6種が記録されています。エビの仲間はテナガエビ、アメリカザリガニで、カニの仲間はサワガニ、モクズガニです。ミズムシとヨコエビ類はエビに似ていますが別の仲間です。

テナガエビとスジエビ



見分け方：テナガエビのオスは長く大きいハサミを持ち、見分けが容易ですが、小さな個体やメスは、額角のトゲの本数を数えて調べます。

アメリカザリガニは、アメリカからやってきた種（外来種）ですが、同じエビ類でもテナガエビはこの地域に古くからいた種（在来種）です。スジエビは調査では確認できませんでしたが、近年、印旛沼で増えているので市内でも生息していることでしょう。

調査報告書より

魚類：ウナギ、シラウオ、オイカワ、ハス、ワタカ、ハクレン、タモロコ、モツゴ、スゴモロコ、ニゴイ、コイ、キンブナ、ゲンゴロウブナ、ギンブナ、アカヒレタビラ、タイリクバラタナゴ、ドジョウ、ホトケドジョウ、クルマサヨリ、メダカ、カダヤシ、カムルチー、ボラ、オオクチバス、ブルーギル、トウヨシノボリ、アマチチブ、ウキゴリ

貝類：マルタニシ、ヒメタニシ、カワニナ、サカマキガイ、ヒメモノアラガイ、コシダカヒメモノアラガイ、モノアラガイ科の1種、イシガイ、マシジミ、ドブシジミ

甲殻類：ヨコエビ科の1種、ミズムシ、テナガエビ、アメリカザリガニ、サワガニ、モクズガニ